



TITLE:

精神の明晰：『世界文化』集団の抵抗と学習：中井正一たちと〈抵抗の学習〉をめぐる諸問題(2)

AUTHOR(S):

吉田, 正純

CITATION:

吉田, 正純. 精神の明晰：『世界文化』集団の抵抗と学習：中井正一たちと〈抵抗の学習〉をめぐる諸問題(2). 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 2004, 3: 35-59

ISSUE DATE:

2004-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/43826>

RIGHT:

吉田：《精神の明晰》

《精神の明晰》

～『世界文化』集団の抵抗と学習：
中井正一たちと〈抵抗の学習〉をめぐる諸問題(2)～

吉 田 正 純

“Clarity of the Reason”

The Resistance and Learning of the “Sekai-Bunka”

(‘International Culture Review’) Group:

Masakazu Nakai and some issues on “Learning for Resistance (2)”

Masazumi YOSHIDA

この小論は十五年戦争下の京都を舞台に反ファシズム運動を目指した中井正一らの『世界文化』集団を対象とし、この複合的な社会運動の「学習過程」としての分析をつうじた、参加者の自己教育——「抵抗の学習」を析出することを目的とする。このうち論文「中井正一たちと〈抵抗の学習〉をめぐる諸問題——1930年代前後・京都の反ファシズム運動と民衆教育の底流」の一部として、グループが「反ファシズム志向」を明確化する1933—35年に焦点を当てている（拙稿（2003）も参照）。ここでは個別の「知識人の抵抗思想」を政治状況一般への回収や倫理的責任・有効性の「評価」にとどめることを避け、①社会運動体としての複合的性格、②運動の社会的背景文脈、③実践理解ツールとしての中井の論考、④雑誌メディアとしての性格、を各章で分析し再検討する。この「反ファシズム運動」が成立し敗北した経緯は単純な因果関係に還元されるものではなく、しばしば矛盾する参加者内の認識変容と参加者間の相互関係の組換えをとみなう集団的「学習」過程として把握されると考える。とりわけ『世界文化』集団でファシズムの非合理主義に加えて順応主義的な目的合理主義——「体制内変革」の幻想とも距離をおくために、批判的理性としての《精神の明晰》（後の『土曜日』スローガンの一つ）を内省的相互学習の理念として練り上げた点に注目したい。

第一章 『世界文化』集団形成の複合性——理性・反戦・集団美学の輻輳

1-1 概略：拡散する「非常時」への批判——『美・批評』再刊への三つの途

1935年2月に創刊された雑誌『世界文化』は直接には前年5月（～10月）に再刊された『美・批評』の後継誌として発行され、グループの構成・性格もこの後期『美・批評』と連続性をもつ。本稿では「瀧川事件」を契機とした前期『美・批評』終刊（1933年5月）から後の『土曜日』発行（1936年6月）に到るこの前期『世界文化』を中心としたこのグループの活動を、反

ファシズム運動における固有の「学習」が形成された場として再検討することを課題とする。従来この集団の活動は一方ではヨーロッパの反ファシズム運動をリアルタイムで報道しつつ「人民戦線」的ネットワークを目指したとされ、他方ではあくまで「知識人」の学術的・評論的なリベラル派の文化活動の枠内で理解されてきた。これらの評価は（事実を含むとはいえ）いずれも当事者の主観的な回想・評価に沿って反ファシズム運動において「本当の階級闘争」とは区別された消極的な「知識人運動」として位置付けられてきたことを意味する。

ここでは一旦この「評価」を離れこのグループの反ファシズム運動としての特殊局面で練られた、文化運動固有の論理と「知識人」の（「実体」ではなく）「機能」としての位置付け、そしてその「集団的主体」論の形成における学習の布置を探りたい。それは京都における消費組合運動と雑誌『美・批評』で形成された運動が、諸文化グループ活動と雑誌『土曜日』に移行する谷間の転換期における、若い批判的「知識人」集団の自己点検と運動イメージの再構成としての側面である。このファシズム成長期の「文芸復興」・雑誌興隆と「集団転向」の中での「もう再び背かれることを知らない文化の、大通り」（真下『世界文化』創刊の辞）という言葉は、「非常時」の「絶望と不安」（同上）の上でのみ意味をもつ所以である。それゆえ従来の政治・理論学習とは異なり、様々な反ファシズム運動の翻訳はもとより社会分析や歴史研究を通じてこの「抵抗」の方途を探究する活発な討議・相互批判こそが、何より同人・グループ参加者にとって魅力を持ったことが読み取れるからである¹。

この時期「ファシズム」自体が単一の権力による統制・統合ばかりでなくあらゆる能動的・自発的参加をうながす動員戦略を組み込むのに対して、「反ファシズム」運動の側は政治・経済分析とは別に現実の「抵抗主体」を特定できなかった。このもとで「集団転向」を経た人々の多くがその「学習経験」で出会い損ねた「民衆像」を巧みに「日本主義」に回収されたのは、その社会の「総体的ヴィジョン」（吉本隆明）の欠落とは逆にむしろその抽象性と過剰に起因するとさえ言える。対してこのグループの後に『土曜日』期で顕在化する民衆参加・共同思考のモデルは、単なる「知識人」の指導内容の転換やその全否定ではなしに、その多元的な文化運動における結節点としての定義が特徴である。それゆえこの時期の「知識人運動」のみを時代・情勢一般で切り出して論評するのではなく、この「転形期」と言われた特異な模索の時期における一種の過渡的な後退ないし熟考のサイクルと見なすのである。

後期『美・批評』の再刊は明確に「瀧川事件」敗北後の危機感を共有し、真下信一を中心とした（特に京都大学文学部の）グループによって、旧『美・批評』や同志社予科などの仲間に関わりかけて成立した。その意味で（同時期の学芸自由同盟や自由擁護連盟と同様に）徐々に姿を現した「日本ファシズム」への「防波堤」を築く意識は共有しながらも、特定の思想信条や指導方針ではなく「美批評研究会」での学習討論を軸とする特色をもった。それは組織形成・運営も真下・中井・新村らが多中心的な人脈を上げ、主張や研究の発表だけでなく歴史・文化批評や情勢・社会分析・自然科学を含め、大衆啓蒙よりはこの内向きのベクトルに比重を置いて活動を展開した。『世界文化』への移行は『美・批評』後期の「世界文化情報欄」以来の反ファシズム国際文化運動情報への関心を引き継ぐが、これも「先進国家モデルの移入」ではなく同時代的な国際的運動を独自に「翻訳」する意図から発したものであった。同時にこの「文化」

は直接には1935年のパリ作家会議の「文化の擁護」を参照しファシズムの野蛮に対抗する文脈で提起されたが、真正な高級文化ではなく『美・批評』以来の大衆文化・アヴァンギャルド芸術への関心を包摂する意図をも読み取りうる²。

そうした一致点の上でなお『世界文化』グループは複数の問題意識と結集軸の輻輳する多中心的な集団であり相互に教育し合う契機があったことを、以下参加者の特徴ごとに三節に分けて検討する。

1-2 真下信一らの場合：「合理的主体とヒューマニズム」の擁護

後期『美・批評』から前期『世界文化』に到る時期のオルガナイザーは思想的にも組織的にも真下信一であり、両誌の創刊の言葉に代表される時代状況の把握と実際の組織化において決定的役割を果たした。1933年当時27歳で「瀧川事件」対策の文学部院生代表として久野収らとともに年長の中井正一らを引き込んだほか、その秋に就職した同志社予科で同僚の新村猛と和田洋一を通じて仏・独研究者を組織して、翌年春『美・批評』再刊に漕ぎ付けた。他方で真下は同窓の先輩である戸坂潤の影響を強く受け唯物論研究会のグループに加わり、京都でのいくつかの研究会で梯明秀や船山信一らとも協力関係で結ばれていた。思想的立場は最も正統派マルクス主義に近い立場ではあったが、(三木清らを経由して) ルカーチやマンハイムを摂取してヘーゲル主義的な「理性とヒューマニズム」と歴史・「主体性」を再評価する独自の立場から異質な人々とも柔軟な議論関係を保ち続ける基盤をもっていた。

真下が『美・批評』再刊の辞に示した「自らを、本当のアカデミズムに、本当のジャーナリズムに鍛え上げ」とした意図は、何より総合雑誌の「所謂ジャーナリズム」と大学の「所謂アカデミズム」への批判が明確に示される。一見素朴にも見える「学問をしっかりと勉強」という基調には(同時期の戸坂や梯と同様に)、メジャー雑誌媒体が戦前の盛期を迎えつつ「非常時」・日本主義の流れの中で表層的な「論争」の枠組に飲み込まれる危機感の現われでもあった。そしてそれ以上に「瀧川事件」敗北の過程で既存のアカデミズムの社会的状況と実践からの分離にあき足らないだけでなく、左翼理論も含め「どこから持ち込まれた何らかの立場や方法」ではない「地に付いた研究」(同上)を求めた場でもあった。それゆえ真下が強調し新雑誌のタイトルにも推した「ロゴス」の語は真実・理性を結集軸としつつ、静的に固定した「思弁的ロゴス」ではなく「矛盾、葛藤、闘争」を含みプラクシスと(ヘーゲルの同一ではなく)弁証法的——動的に統一する実践の論理を意味した³。

こうした観点は戸坂をはじめ唯研グループの広義のマルクス主義的社会分析に影響を受けながらも、(戦後「主体性論争」で自ら展開することになる)実践主体の選択・投企の問題を単純な構造への還元と見なさない点で(中井や武谷と共通する)特色を示した。この後期『美・批評』の時期から繰り返し論じたシェストフの「不安」・ニヒリズムや合理性へのペシミズムの流行に差し迫ったインテリの自己矛盾を見出しつつ、「賢くなった手で眼を、賢くなった足で頭を導く」ためのロゴスの「見直し」を求めた。その延長線上にブレハノフの「運動の論理」としての弁証法をも「認識論的意味を抹消した、存在論的規定」であり、「プラクシスに含まれている飛躍的統一、超越的結合の一面」すなわち「主体的契機」を欠落した思弁的規定とし

て批判する。ここには確かに「レーニンの段階」等と呼ばれた当時のマルクス主義解釈に惹かれつつも、実践の中で思念や抽象と異なる「予期せざる抵抗」を受けて「合理性」を深化徹底する立場として（久野収や栗本（島津）勤ら哲学専攻の「ヘーゲル研究会」とともに）独自の路線を導いた。

その反ファシズム運動への参加動機はもちろん久野・中井らとともに「瀧川事件」の「哲学、文学面での継続」が直接の契機とはいえ、例えば同じ京都の学生マルクス主義グループが非合法戦術の急進化・先鋭化のみを求めた隘路とは対照的である。そこにはこの直前に院生時代に天王寺師範専攻科（後の大阪教育大）で「新興教育」運動等に参加した（自分より年長の）現場出の教師たちに接する機会を持ち、「満州事変」下の教育運動について強い印象を受けたことも影響していると思われる。当時の左翼運動家が『世界文化』を「プチブル」の自己満足・文化主義と切り捨て罵倒さえしたという事実は、「知識人」（＝理論）を無媒介的に「大衆」から切り離し狭義の政治・理論的「主体形成」を絶対化する当時の（それ以後も）姿勢を自ら示している。真下らの組織論はただの戦術の柔軟性ではなく、（例えば『唯物論研究』誌上の加藤正との論争でも提起されたような）客観主義的な純粹理論とは異なる「真理自体が内実的に党派的」という立場から、合理性を実践と討議の共同性に求めたところに特徴があった⁴。

そのことは単一の客観的真理体系の「理論学習」の同心円的拡大ではなく複数の角度から社会状況に接近し「主体」を定位していくという、「正しいものを求めつつ、動いている人々の友」（『世界文化』創刊の辞）の役割が導かれたと言える。

1-3 新村猛と和田洋一らの場合：反戦運動へのパーソナルな信念の形成

『美・批評』再刊以降に参加した今ひとつの重要なグループは、同志社大予科で真下と同僚だった新村猛と和田洋一を中心としたフランス・ドイツ文学専攻の若い研究者であり、最も活発にヨーロッパなどの反ファシズム運動を翻訳した人々である。この時期参加した同人は新村の周りに瀬津正志・森本文雄・市村恵吾ら、和田の周囲には臼井竹次郎ほか『カスチニエン』誌同人などが含まれ、主に後期『美・批評』以降の「世界文化情報」欄の執筆を担当した。新村・和田らはこの時期以前からいくつかの雑誌で反ファシズム運動の紹介記事を執筆し、また学生を中心とした文学誌『同志社派』や学生新聞でも真下とともに影響を与えていた。他方で新村・和田はともに消費組合運動の活動を通じて能勢克男や中井と接点を持ち、先に逮捕・解任された松岡義和や住谷悦治らも含めて反戦・反ファシズム的な左派人脈が真下・中井らのグループに合流・結合した形であった。

新村猛は京大仏文卒業後「満州事変」の衝撃の中でロマン・ロランやジャン・ジョレスの反戦思想とともにマルクス主義にも徐々に接近しつつ、1932年頃からフランスの反戦反ファシズム運動の翻訳をいくつか取り組むようになる。新村にとってこのロランやジード・バルビュスらの「紹介」は相手のない模範例の摂取ではなく、戦争・ファシズムさらに社会主義・実践・文化等々について「生々しい経験を重ねながら、思考を深めたり討議を繰り返す」自己形成のパートナーでもあった。新村を中心とした瀬津らのグループはこの時期「文化擁護世界作家大会」をはじめ反ファシズム運動の多様な展開を自ら探りつつ、（政党ばかりでなくそれに先行

する）大衆的統一戦線の意味とそこでの「知識人」・文化運動の位置について問題提起し続けた。それは自ら「期せずして知識人のささやかな人民戦線文化運動を行なった」というように端緒的なものではあれ、それ以前の消費組合運動での活動経験やフランス啓蒙思想の研究などを緩やかに結びつける形で討議・学習の場を主導していく⁵。

他方和田洋一の場合は、学生時代から「満州事変」の時期にかけて戦争とファシズムに危機感を強めリベラルなクリスチャンとして成長しながら、同僚の松岡・真下や義弟の守屋典郎らの影響を通じて左翼運動へも共感と敬意を強めていた。1933年頃には同志社予科で教師をしながら「瀧川事件」や同志社での住谷・松岡らの逮捕・辞職を間近で経験しながら、京大独文の雑誌『カスタニエン』や学生新聞などにドイツ亡命作家の反ナチス活動を紹介する文章を「意気しょう沈している日本のインテリゲンチヤに伝えようと」執筆していた。その意味で新村と同様に『美・批評』グループ参加以前からヨーロッパの反戦反ファシズム運動の知識や思想形成を経てきており、非合法共産党に対してもその献身性を認めつつその教条的セクト主義への疑問も強くしていた。ただ新村らがフランス人民戦線の高揚を肯定的に捉えたのとは対照的に、和田はマン兄弟やブレヒトら亡命作家の苦境とドイツ国内での反ナチ運動の困難を綿々と綴る一方で日本の状況には強い「絶望感」を抱いていたという。

この新村・和田を中心とした部分は後期『美・批評』再刊以降に同人として参加し「世界文化情報」欄や反ファシズム作家の翻訳や国際的運動・情勢の分析・批評を掲載し、やがて『世界文化』後期では（真下らに代わって）その雑誌・編集方針の中心となる。これらは瀬津が回想するように主に大衆啓蒙・宣伝よりは同人内部の「内向き」な活動に比重を置き、当時の知識人・学生からも「ハイブロー」と印象を受けるほど先鋭的な理論的・思想的内容の咀嚼とその内部学習・討議を重視した。その根拠は新村・和田らが（状況認識に幅はあれ）抽象的な理念・主義よりは、個人の経験と感性に根ざした反戦反ファシズムへの信念と「人民戦線」的な運動へのこだわりとしてより広い文脈でのヨーロッパの知識人・民衆（文化）運動に絶えず関心を向けさせたことにある。だがそうであるからこそ自分たちの運動の弱小さや「大衆基盤」の不在に（当時の左翼運動と比較して）シビヤな認識を持ったとも考えられ、「人民戦線」の代行として過大評価するよりは地道な反ファシズム運動の「翻訳」を自らの仕事と考えていたといえる⁶。

森本・市村・瀬津らも含むこのグループの蓄積は人民戦線諸雑誌の最新記事や様々な文化運動紹介を行なって、この後の雑誌『土曜日』や文化諸サークル結成の場面では「模範例」の模倣や「上からの」方針ではない運動イメージの構想や理解に大きな役割を果たしてゆく。

1-4 旧『美・批評』グループの場合：集団美学と文化批評の継承と飛躍

再編前の『美・批評』は「瀧川事件」前後にメンバーの就職・異動や財政難から休刊していたが、後期の再刊後も中井正一のほか辻部政太郎・富岡益五郎・長広敏雄が引き続き中心的な同人として参加し続けた。この時期初期『美・批評』の同人だった藤田貞次・藤井源一ら美学プロパーの研究者は同人から離れるが、それ以外は「新派」と言われた若い真下・新村らに編集移行後も引き続き演劇・音楽・映画の批評などで批評活動を続ける。中井は「瀧川事件」や

『美・批評』再刊に際して議論の中心にいたが指導者というよりも（消費組合運動を経て）、運動の渦中でファシズムの興隆や真下・久野らの運動に強い印象と影響を受けて「半歩左」（真下）に移り、次第に立場と思想を固めていく過程にあったといえる。この前期『世界文化』に向かう時期に旧『美・批評』グループは比較的目立たない位置ながら大衆文化批評や「集団」の理論的考究の支柱的位置を占めるとともに、この雑誌の「文化運動」としての多元的性格を決定付ける役割を担った⁷。

中井をはじめ旧メンバーの専門領域を越えた広い問題関心は武谷三男・原光雄ら自然科学研究者や熊沢復六（ロシア研究）・米田三治（英米研究）ら翻訳・紹介者を引き付け、雑誌・研究会の活動の幅を広げることに成功した。また何より同人相互（当初20名程度）やその周辺による「美批評研究会」や日常的な学習・討論活動の重視は、個々の意見表明と講演会や誌上討論に留まった他の雑誌・研究会と比較して参加者が共通の目的と批判性を形成する上で重要な役割を果たした。特に各人が後に「私の大学」（武谷）と振り返るように久野・真下・新村・武谷・瀬津らが中井に対して「唯物論」や情勢認識をめぐる議論を提起し、激しくやり取りしながら互いの考えや知識を深め共通認識を築き次のテーマを設定することで進められた。これは30歳前後の若いメンバー構成やグループの「作風」というものに留まらず、参加者間に共有された「人民戦線」イメージにおける意見相違の尊重や理論的基盤のセクト性排除の合意に加え、『美・批評』以来積み上げられた討議・合理性を重視した集団・組織論の蓄積に思想的根拠を持つ。

だが一方で旧『美・批評』メンバーにとって『世界文化』への再編移行は無条件に反ファシズム運動志向への「発展」に繋がるのではなく、短期的には情勢の急展開に規定されたアカデミズム内部での活動への限定も意味していた。それ以前（1931年前後）の「京都消費組合」への能勢・中井・新村らの参加による大衆運動経験や、中井・辻部らの自主映画制作を含む大衆文化の批評・創作活動といった「実践」が（各人の転境や移転等もあり）中断していた。また初期『世界文化』では所謂「文化運動」をファシズムの「文化破壊」（バーバリズム）に対する合理性一般の肯定が主流で、（大衆）文化の内部において抵抗と抑圧の錯綜を意識しその関係変容を精査するという関心が後退している（久野の回想）。

このように後期『美・批評』以降の活動は真下・新村・中井を仲立ちとしたいいくつかのネットワークに共通の関心をもつ諸個人を加え、その周りに歴史学・経済学・哲学・法律・物理学などの左派的論者を緩やかに吸引したことで成立した。次章以降で見るようにその関心は単に「海外の反ファシズム運動紹介」にとどまらず、（マルクス主義や自由主義・ナショナリズムを含め）様々な近代以降の思想・文化を中期的な社会的・政治的文脈で再考し抵抗のスタイルを編み直すことにあった。先回りすればこの活動の一部から後に（1936年以降）より大衆的な『土曜日』誌の編集発行と映画・演劇・音楽サークルの組織化の展開が生まれ、『世界文化』も反ファシズム運動の翻訳と文化批評を大幅に拡充していく基盤となる。その意味でこの時期の活動は次に述べるファシズムの台頭のみならず「集団転向」と「文芸復興」の狭間で揺れ動くアカデミズムと知識人の「転形期」（亀井勝一郎）にあって、あくまで自力で思考し情報を咀嚼し共有・討論するための「抵抗の学習」の熟成期間を意味した。

第二章 『世界文化』創刊を取り巻く諸状況と「文化運動」における学習の再評価

2-1 背景状況：「転向」と「転形」の狭間における位置取り

1933年6・7月は後の『世界文化』集団にとって（また日本の反ファシズム運動にとって）破局的な「不可逆点」に向かう危機の予兆と、同時に「敗北」を刻印したぎりぎりの可能性を模索する「奇妙な猶予期間」（サルトル）の開始を意味した。年頭からの反体制運動総弾圧に続き、6月佐野・鍋山の「獄中転向」が報じられる一方「反ナチス・ファッショ粉碎同盟」が結成される中、5月以来の「瀧川事件」解決案反対の学生大会が開催されていた。これに続く「大量転向」の波と「粉碎同盟」の分解・破産ののち、アカデミズムの切り崩しや同志社大の住谷悦治・松岡義和らの検挙・失職を迎え、その混乱の中で雑誌『美・批評』（前期）も休刊に到った。だがこの後数年間に『世界文化』を含む様々な「抵抗」の試みの発生には、決して敗北で「状況の先端へ押し出されてしまった、中・後衛の知識層の運動」（菅）ではなく、むしろその新たな条件の下でこそ「学習」を再構築することを可能にする内的・外的な諸要因が準備されていた。

まず政治思想の領域ではかつて「思想の科学」グループの「転向研究」が提起したように特殊「1933年の集団転向」の現象は個人的な屈服や変節でなく、自然発生的な「状況」から超越した「理論人＝主体」として形成された「知識人」の一群が大衆の背反をきっかけに「転向」に導かれる条件があった。そこでは「状況追従」や順応主義よりはむしろ積極的に（巧妙な操作に誘導されながらも）、「プチブル的」自己を捨て「大衆の現実＝日本の共同体的実感」や「民族＝土着（＋天皇制）回帰」に到る線に絡め取られる事態の前触れであった。それは「瀧川事件以後」においても運動から隔離された「殉教者」と偏狭なナショナリズムへの急分解の間に、喪失感を抱えた膨大な「天皇制的ニヒル・リベラリズム」（藤田1975）と少数の旧い個人的な「リベラリスト」の抵抗言論のみが残る局面が生じていた。しかしここで生じた「大衆＝現実回帰」的な傾向は一方で後に「近衛新体制」に連なる体制内変革に糾合される萌芽を生じつつ、他方で（関東では『労働雑誌』や『生きた新聞』のように）「転向者」を含めて大衆の自然発生性・感覚・生活を対象化する苦闘も少数ながら生じつつあった。それは「学習」を組織する発想においても、「大正」デモクラットのようない理論・啓蒙へのオプチミズムとは完全に異なる、自らを含むネガティブな「感覚」の抉り出しと内省を要求するものとならざるをえなかった⁸。

これと関連して社会的な面では1920年代末から開始した大衆の「自発的参加」の組織化が、諸組織・メディアを通じて国家レベルの時間——空間軸に統合し方向付ける路線が敷かれはじめた。とりわけこの時期「非常時」や「生命線」（中国侵略）といった単一化した〈共同体的〉時空間把握が強く打ち出されるとともに、「知識人」層に大衆と一体化する（保守反動ではなく）「革新」の方途として提示・形成されてきた。それは一つには後述の「昭和研究会」（またその「教育問題研究会」）に代表されるその「総力戦」的な計画・変革への欲望を体現する過渡的な「合理的——近代的」運動に吸引され、例えば社会教育における「民間」教化運動の組み込みの事態も進行する。他方でこうした国家機構や大規模メディアとも従来の革命理論宣伝とも異なる中間的な「雑誌」グループがこの時期次々に興り、「研究会時代」とも呼ばれ

る小グループの形成(郡1968)が盛んに行なわれた。

こうした変動の帰結として文化のレベルでは、文学・批評における「文芸復興」に代表される一連の文化・表現活動の興隆とナップ(日本プロレタリア作家同盟)解体などプロレタリア文化運動の崩壊・終焉のなかで、それ以前の(狭義の)「政治」主導・従属からの離脱が進行していた。それは前述の「非常時」の醸成への反発という受動的な形から発しながら、(「転向文学」をはじめ)「民衆=民族回帰」を基調としつつも主導的かつ直接に(国民=国家の)「改革」に参加しうる(すべき)という流れが明確化しつつあった。「転形期」とも呼ばれたこの状況においてアカデミズムないしこれと相似形の「理論主義的」政治運動において抑圧された個人の情動や情感の強調とともに、組織されるべき「遅れた大衆」ではなく自ら学びなおすべき現実としての民衆が「再発見」される。これは大勢ではこの時期以降創刊された『文学界』や『日本浪漫派』のように「日本精神」の下に緩やかに囲い込まれたファシズム化の「民衆の現実」に溶解する傾向に組織されいくが、その内外でこの「現実」の亀裂に沈潜する小さな試みも開始されつつあった⁹。

京都においても1933年以降は河上・住谷らの検挙や「瀧川事件」といった大学周辺だけでなく社会運動全般の後退が進むなか、非合法共産党の壊滅に加え「満州事変」以降の排外主義機運の高まりを受けて合法的無産政党や社会諸運動も混乱・退潮した。こうした政党・労働運動の中から新日本国民同盟・日本国家社会党など「国家社会主義」勢力の京都支部も結成され、学生においても1934年前後には京大清明会や同大国防研究会といった右翼運動が登場してきた。これに対して「瀧川事件」収束後には「反ファシズム自由擁護同盟準備会」などが残存する諸運動を結集するため幾度か呼びかけられたが足並みが揃わず破産し、さきに統一された京都消費組合運動もそうした余波で1934年頃には組織的・経営的に困難を極めた。1935年初にかけてこの沈滞期を漸く脱出して分散した諸個人が再結集して言論活動を開始し、京都では『世界文化』創刊(2月)を嚆矢に文芸誌『同志社派』(4月)『リアル』(5月)、そして『土曜日』の前身となる『京都スタジオ通信』(5月)などが次々と活動を開始した。このいくつかの試みは地下活動に邁進した学生運動家と共に民衆運動の不在と侵略翼賛世論の嵐のなかで孤立を強いられ、やがて1936年頃抵抗運動の「最後の高揚」を迎えるまで綿々と続けられていった。

2-2 社会教育における教化体制：「上からの」の再編成と「下からの」政策指向の錯綜

ここでこの時期(1934年前後)の社会教育体制の再編成について取り上げることで、この時期の「上からの教化動員」に留まらないファシズム化進行の内因を検討しつつ、当時の抵抗の「対抗軸」を考える糧としたい。別稿で検討したようにこの直前期(大恐慌以降)に動揺する農民・都市労働者層へ教化・修養団体の組織化をいち早く進めたのは軍部・民間右翼のプレ・ファシズム運動であり、いわば「草の根」民衆運動として浸透していた。1929年以降の社会教育局体制の「教化総動員運動」は成立当初からこうした運動の自然発生性に対抗しつつも、その「民製的運動」(下村社会教育局長)としてのエネルギーを吸い上げ「思想問題講座」をはじめ農村・工場の「自立・更正」を国家政策に転化することを大きな課題としていた。これに対し「満州事変」以降の社会教育体制は後の「総力戦体制」への過渡期として、「常会」と青

年団に代表される農本主義的農村組織化と行政（政策）計画化を両輪とした、包括的な教化運動網への解体吸収に特徴付けられる。

まずこの時期の社会教育局は何より「農村社会教育」への傾斜を強めながら、「農山漁村経済自力更生運動」など農林省・内務省の主導する農村経済再編と軍部の「非常時」体制組織化、それに報徳社系の「常会」や民間修養団体の教化面を思想的に統合することに重点をおいた。これらは疲弊し小作争議の激発する状況にあって対立を調停して収拾する役割を期待された農村中間層（中農・小自作）を主な対象として、画一的な「上からの統制」ではなくむしろ自発的・自律的な「協同」組織として構想された。具体的には農村団体の青年団・青年学校組織の全国的な吸収再編であり、かつて自由教育運動を推進した部分を含む農村青年指導層の積極的な啓蒙・学習への関心を、「社会教育委員」制度（1932）等を通じて吸い上げる意味をもった。そこに文部省・社会教育局が内務省的な更正運動のようなファシズム的自治組織には同調しつつも消極的な理由があり、（単なるセクショナリズムに留まらない）「国民精神作興」的な教化動員政策の特徴があった。だが他方で都市部においては青年訓練所・実業補修学校の青年学校への再編（1935）と民間修養団体の統合を基軸としたにも関わらず、むしろ当初の自発性を削ぐ形で修養団体そのものが不活発化・停滞した¹⁰。

他方で後の「近衛新体制運動」や翼賛会文化部で中心的役割を果たした「昭和研究会」が、組織者の後藤隆之介・田沢義鋪・後藤文夫をはじめ「大日本連合青年団」本部人脈で形成され、組織的にも思想的にも民間教化運動と密接につながった面を強調したい。この「昭和研究会」発足以前から青年団本部内には「農業問題研究会」（蠟山政道・那須皓ら）と「教育制度改革研究会」（阿部重孝・関口泰ら）が設置され、国策研究所設立時（1935）の原型となったのである。これは田沢・後藤文夫（ともに青年団本部理事長経験）らの農本主義的農村組織化と修養主義的教化を結合した、社会教育における青年団運動のファシズム的展開の思想的・組織的実体として大きな役割を果たしたことは言うまでもない。加えてこの後自由主義者や転向マルクス主義者さらに「革新官僚」を加えた昭和研究会が、岩波『教育』グループの城戸幡太郎や宮原誠一らを加えて（教育研究会）「政策科学」的な指向を強め翼賛体制の教育・農村政策を一時期掌握するに到る面でも重要な意味をもって来る。

これらが「総力戦体制」形成期にあたってそれ以前の官製の・精神主義的傾向に対して政策科学的関心を対置しつつ、「朝野一体の総動員」（昭和研究会設立趣旨）の翼賛会・国策研究の中心へと転化していった深層を考える必要がある。社会教育局の主導する指導者（社会教育委員）・思想注入による「上からの」教化動員と昭和研究会を中心とした「下からの」国策提言・参加型ファシズムは、後者が吸収されながら相補的に翼賛体制形成を実体化する役目を担った。むしろこれは（昭和研究会も『教育』グループも）この時期「瀧川事件」のように文部省の「思想統制」には反対し、（阿部らの）青年学校政策にも見られるように教育権の拡大や「生活主義」・実践指向など社会教育行政と一線を画していたのは間違いない。にもかかわらずこの合理主義的な近代化潮流がこの1930年代後半に盛期を迎えながら、直後にほぼ全面的に戦時協力に移行したのは、少なくとも何らかの内的な根拠が存在したといえる¹¹。

こうした点で「瀧川事件以後」は社会教育の領域でも従来の左翼運動の退潮・「転形期」や

自由主義者の台頭ばかりでなく、その対抗軸においても「政府（ファッショ・非合理）対民間（民主勢力・合理）」では到底割り切れない錯綜した構図があった。そのなかで既存の「学問の自由」や民主的諸権利の防衛またはリベラリスト諸個人の抵抗とは明確に異なる、『世界文化』グループの「反ファシズム」運動における集団的抵抗主体の次元をまず明らかにしたい。

2-3 『世界文化』集団評価の視点：「文化運動」の独自性発見と「学習」の再評価

さて『世界文化』創刊前後の真下・中井らの形成したグループの政治的立場は、おおむね「瀧川事件以後」の状況での「非共産党系」ということで「アカデミズムの自由主義」に無前提に括られることが現在でも多い。たしかに上述の通りこの1935・36年の社会・政治運動を特徴付けるのは非コミンテルン系のリベラリスト言論の隆盛であり、「学問・言論の自由」をめぐる攻防で多くの新興雑誌の一つ（京都地方版？）とされた理由もある。この点について当時の「リベラリズム」概念の多様性（曖昧さ）や個々の言質から反証するのは困難だが、このタームが何より非「正統派マルクス主義者」への・特に文化・社会領域における固有の抵抗可能性への無理解無関心に由来する面は否定しがたい。実際人脈的にも思想的にも最も近い戸坂潤や三木清が東京で組織した唯物論研究会やプロ科研との評価の違いや、多くの論評・研究記事にもかかわらず「欧米文化運動の紹介」といった評価はほぼこれに尽きる。

当時の同人たちもこうした「主流派」からの微温性・日和見といった軽蔑を受け続けながら運動を続け、一方で中心人物・中井に対しほぼ全員が自分たちの思想的立場を左翼的（マルクス主義的）と見なしながら参加していた。たとえば『世界文化』について同人ねずまさし（楠津正志）のやや自嘲的な「プチブルの同人雑誌」評と和田洋一の反論をみれば、（その認識差に関わらず）当初から「プチブル・インテリの自己満足」といった罵倒に面し反発していたことがわかる。和田はクリスチャンで真下・新村・久野・武谷らとも異なり終始マルクス主義に同調しなかった例外的な同人といえるが、それでもリベラリストよりは共産党の献身的な反戦運動に理解を示していた。にもかかわらずねず・和田とも『世界文化』独自の路線を選んだのは、当時の政治運動全般の「文化」運動無理解・セクト主義（社民主義・リベラリスト攻撃）によるインテリ排撃への反発だけでなく、「インテリ」文化運動固有の質的違いとその政治的意義への確信があったからといえる。

それは和田が指摘する「プチブル」という言葉が「インテリ」軽蔑と裏腹に「魔術性」をもつとともに、階級性の（経験を通じた形成ではなく）純粹・観念的な「獲得」の強迫的な絶対性を有してきたことへの共有された疑問であった。これに対して『世界文化』グループでは新村らが意欲的に紹介した人民戦線運動における「知識人」の役割に加え、戸坂や三木らの組織した運動の（批判的）摂取から、相互の差異や意識の相違を含む運動の多層性のイメージが存在した。その前提として旧『美・批評』グループ（中井・辻部）らが性急な「大衆啓蒙」に先行して「自己啓蒙」形態を唱導し、「広く文化人にその結果を問い批判を受け以て相互啓蒙をなす」（当局調書から）ことを重視したことがあげられる。その意味で次に詳述する後期『美・批評』から『世界文化』創刊の流れは既存のリベラリズム・アカデミズムの防衛闘争や狭義の「文化運動」紹介雑誌といった文脈から一旦離れて、「転向と翼賛」化の嵐のなかで一

歩下がった自己反省的な運動として再検討する必要がある。

後の『土曜日』スローガンの一つ「精神の明晰」は真下が『世界文化』創刊の辞に記したような、危機の「不安と絶望」において「たえず本当のもの、正しいものを求めつつ、動いている人々の友」というこの時期共通の「非合理への抵抗」の立場に拠る。その意味でこの若い同人の理論的探求や批評、そして反ファシズム運動の「紹介」や書評・歴史研究はすべて、「大衆」との関係を再構築する前段階での自己イメージの練り直しとしての「学習」の場と把握できるのである。

第三章 中井正一における「集団的世界感／実践的主体性」への転回

3-1 「蓄音機の針」の下で：「瀧川事件」と「ハイデガー問題」を通じて

この章では『世界文化』創刊前後の中井正一のテキストをこの時期の状況と実践の中に再定位することを通じてその問題関心を浮き彫りにしながら、その反ファシズム運動としての「学習」の位相を考察する。この時期中井はこの集団の（「伝説化」したイメージと異なり）理論的指導者や実践リーダーというよりは、「瀧川事件」に際しても久野や真下に「オルグ」されて学生に共鳴し文学部大学院生の活動家として動き始めたに過ぎない。また初期『美・批評』の時期には自ら大衆文化批評や自主映画制作に取り組みながら京都消費組合の実践に参加したりしてきたが、『世界文化』への「反ファシズム」再編方針には慎重で新村や真下に強く促されて（弾圧の覚悟も含めて）決意した面が強い。さらに後期『美・批評』では「模写論的美学的関連」（28号）・「リアリズムの基礎問題」（31号）の主要な二論文を寄稿しているものの、創刊当初一年間（1935年）の初期『世界文化』には原稿を掲載されていない（予告のみ）。

それにも関わらずほぼすべての参加者・同人が中井を『世界文化』グループにおける出版・学習活動の中心人物と回想する理由は、常に討議や方針を組織し牽引する位置にいたばかりでなく、その中で集団と運動のダイナミックな構想を提示してきたためと考えられる。真下や新村あるいは若い久野・武谷にとって中井は自らの「唯物論的」思想や立場をぶつけ練り直す恰好の相手であり、同時に多様なメンバー・協力者の関心を結びつけ新たな疑問や問題意識を掘り起こす刺激剤でもあった。だがこの時期中井はこうした『世界文化』以外でまとまった諸論考を発表し、内容的には初期美学理論から『土曜日』期のエッセー・批評に移行する過程で同時代の諸思想と対決した「集団的主体」の実践的ダイナミズムをめぐる考察を展開していた。そしてそれは純粹に理論的展開として予め得られたのではなく、ファシズムの展開への屈折した格闘と内省を通じて運動系の経験した実践の成果と失敗から練られた苦い成果といえる。

わけても「瀧川事件」敗北の内部からの総括と自ら深く影響を受けたハイデガーのファシズムへの協力へのインパクトは、1933年前後における中井の諸テキストを通じて鋭い亀裂を生じ新たな展開を不可避にしている。たとえば「瀧川事件」渦中に新聞発表されたエッセー「蓄音機の針」では強権による「学問の自由」破壊への反対のみならず、大学・学問・学生ひいては人間の「道具化商品化」への「最後の抗争のあらわれ」として描いている。それも一時的な現象面にとどまらず独創・個性といった「個別性の最後の拠点」としての「研究の自由」の「歴史的転落」が宣告されつつも、そうした人間の「蓄音機の針」化への戦慄や不安をこそ焦点化

する必要があると述べる。中井自身翌1934年（一年間のみ）アカデミズム内部での研究職を得るが（文学部講師）活動・逮捕を経て再び復帰することがなく、やがて西田・田邊を含め京都学派全体が有効な抵抗の手立てをもたぬまま翼賛体制に押し流されていくが、この前段階を示す事件の結末に他ならなかった。

そしてほぼ同時期に起こった今ひとつの「事件」であるハイデガーのフライブルグ大学総長就任と「ドイツの大学の自己主張」の発表は、これ以前その思想に圧倒的な影響を受けてきた中井の思考展開にも重大な転機を与えた。すなわち「集团的主体」への審美的関心と理論的体系化から離れるため、「無媒介の媒介」としての実践への「投企」や非連続の時間的存在といった用語を導入してきたことが、中井たちの立場と相矛盾する帰結に到ったのである。ハイデガーの「民族国家への至高の奉仕のための緊張した結集」をアカデミズムに訴え「歴史的負託」を述べた主張は田邊や三木らに当初激しい拒絶を生んだが、やがて和辻らに始まり所謂「京都学派」全体に波及したように「不安」の空気を鋭敏に掴み取る要素を孕んでいた。中井の場合例えば既に「合理主義の問題」でハイデガー哲学が「全体主義・非合理主義」に転化することの危険性を予感しながらも、まず「危機」に面して傍観者としてではなく行動・集団に「投企」する意味を受けた上でぎりぎりの批判的な摂取に向かっていく¹²。

この二つの事件の岐路にあたって中井が目指した「学習」の質は、従来のアカデミズムの観念的体系化ともハイデガー的な無条件の「民族精神」との実践的合一とも異なる、思考の場所——「精神の明晰」を希求する共同性を模索した。

3-2 「模写論的美学的関連」と「現代における美の諸性格」から

1934年再刊『美・批評』に提出された「模写論的美学的関連——一つの草稿」において中井は、従来の意識が「主観、自我、内容」を意味する「実体論的立場」に対し、カッシーラーの「機能論的立場」とハイデガーの「存在論的立場」を選択する。そのいずれも実体論の外界が意識に「鏡のごとく映される」ような「心理的抽象」を拒否し、「思惟進行と思惟対象との新しい必然的な秩序」を意味する「模写」（アッビルド）を問題とする。既に1930年ごろ機能（関数 function）概念による心理主義的美学的乗り越えを提起していたが、ここではむしろそれが「どこに向って、全体的機能が距離をもち、立ち向かっているか」の方向性に無関心だというハイデガーの批判を重視する。その存在論（実存 existence）の立場は「乗り越えてゆく前衛構成への見透し」として把握され、「情況の発見的認識」と同時に「実存在することより出発する自己開示の通路の深さ」——「より自分らしき存在のしかたの発見」とされる。

ここでハイデガーは「単なる図式」としての関係・機能と異なる「具体的なる世界みずからの通告」への足がかりとされるが、カッシーラーの機能論も清算されるのではなく無前提な「現実」への投企を検証する論理性として組み入れられる。その一方で当時の（模写論自体を含む）マルクス主義の認識論を咀嚼しながら「物質に独裁権を与える」のみの反映論を批判し、イデオロギーとしての反射・反映（独断的歪曲）から「現実世界情況の模写」（＝基礎射影）に切迫する論理性・認識性を重視する。ここでは「行動体が現実的自己を発見する」ための意味の「体型」（同時的図式性）を実現し「人間的原方向の基礎射影を暴露し完成」するのは実

際には「非現実の現実」である「芸術的製作機構」がイメージされている。それは「線的に流れる」自然的時間に対して「いずれの瞬間もが発出点」である技術的時間の「実験の行動性」が想定され、「人間の積極的・目的的活動の線」にそった方向性が探求される。

一方同年雑誌『理想』に発表された「現代における美の諸性格」では「実体論」的主観の「自律的個人主義」の単一性に対して、ここでもハイデガー的「存在論」が「主体の現在の実存性に重心を置く」「時間的瞬間の一回性の感覚」が対置される。前者の近代的自我の自己完結的「主観」は「市民文化の自己発展」を進める一方「孤独、限界、遊離、無為」に到ったが、後者は「流動的發展性に自我の様相を溶解し……躍進的・不斷の瞬間の持続における決意的不安」と把握される。だがここではそれが第一次大戦後の「個人」解体と不安の「危機的時相の実存的反省」とされる一方、それが「あらゆる現象が根源的偶然であるがごとき感覚、すべての行為が無動機であるがごとき感覚」に至る危惧も表明される。これはハイデガー（と同調者）のファシスト的「民族の運命」に一体化する「決意」を固めたことへの批判を示す一方で、その検証軸として「集团的歴史性」を導入することを意味した。

すでに初期中井は『美・批評』集団と共に「社会的集团的性格」への美学的・理論的意味やその動態に関心を寄せてきたが、新たに生産・技術・労働といった歴史的概念を加えて「集团的市民主義」に取り組んでいく。ここではハイデガーも（反ファシズムを表明した）ジードも同様に「知識階級」の個人的「無動機の行為」として疑問に付された上で、新たな「美の諸性格」を伴う実践の感性としての集团的「世界感」への移行が考察される。その「世界感」の基準として中井は「組織的主体性にみずから共に属している」という「仲間の感覚」としての「組織感」、「生産力の一環にみずからが属している」という「自然力の積極的生成」に没入する「生産感」、そして「あらゆる現実を歴史的なる段階と方向と見透しの下に捉える」という「事実感」の三つを挙げる。あくまで図式的な提示にとどまっているとはいえ、ハイデガー的な無根拠の実践と分岐する契機が模索されている¹³。

この「瀧川事件」前後の情勢を経て「運動」の方向性を決定論的な階級概念とも主意主義的な「集団」一般とも切り離れた上で、「大衆」との一体化でも「指導」でもない歴史的な「世界感」を練り上げる作業を進めようとしていた。

3-3 「リアリズム論の基礎問題」：自由主義－ロマン主義批判

こうして中井は「模写論の美学的関連」と「現代における美の諸性格」において美学論文の形をとってではあるが、「集団」に関する考察を具体的な歴史性に位置づけるとともに、実践への参加の意味を探ろうとしたといえる。合法的左翼運動の壊滅的状況と大衆の戦時体制への包摂のなかで「知識人」の運動への参加は自明のことではなく、むしろ侵略戦争への一部の積極的加担と大勢の消極的な沈黙が是とされるなか根底から「参加」自体の意味が問われた。認識論において提起された「模写」論はその意味で（既成の階級概念のような）社会構造の固定的・静的な概念把握ではなく、アクチュアルな「現実世界状況」の存在論的な把握としての学習の契機を含意したものといえる。それと同時に集団行為（階級闘争）をあるべき「実体」ではなく現実の「機能」と方向付ける「方向」から再規定し、そこにおける「集团的・世界感」を

追求する「集团的知識人」として自分たちを位置づけようと試みたと考えられる。

こうした観点から「模写論の美学的連関」に次いで後期『美・批評』に発表された「リアリズム論の基礎問題二、三」の問題構成を読み解くことで、このグループが具体的に論争対象と考えていたものについて検討したい。1934年最後期の『美・批評』では文化運動で議論された「リアリズム論」を検討する特集号が出され数人の同人が論文・翻訳を載せているが、その紹介というより当時のいくつかの潮流との批判関係を明確にした点で注目される。特に相次ぐ「集団転向」とナショナリズムへの移行——とりわけ「文芸復興」と並行した「日本浪漫派」をはじめとした作家・批評家の運動は、連動した「京都学派」の動向とあわせ同人の主な関心でもあった。さらに注意深く読むならばこの時期ファシズムへの対抗上注目された自由主義に対しても中井はその限界を指摘し、「ロマン主義」（日本浪漫派）と究極的に対立するものではなくむしろ相俟って「民族主義」を下支えする点を強調していることに注目したい。

この論文ではロマン主義の歴史的な考察とその自由主義に対する「両義性」を考察しているが、イエナ大学を去る「自由主義者」フィヒテを「瀧川事件」と重ねロマン主義の民族主義への傾斜も比すなど関心は当時の情勢にある。中井はロマン主義を改革か反動かではなく「歴史的に一回的」な「転換、変容、転身の過程」、すなわち「個人の解放」から「民族の血」への復帰、封建制の破壊と古代汎神論への回帰という二面性を指摘する。そしてその「文芸復興」と「宗教改革」を混交した運動がやがて「世界中の多くのブランデンブルグ侯」によって、「各民族の血に訴えるような悚撃に対して誇張と惑溺を準備」される点で「一九三四年度にも不足はない」と述べる。こうして「ロマン主義の夢」は封建制破壊と個人主義・啓蒙主義を希求しつつ、「文芸復興」とともに「民族化」の運動に他ならず「国際主義」に敵対する民族主義ないし「国家主義」に転化したことに注意を促す。

そして同時に歴史的に自由主義がロマン主義の敵対物ではなくむしろその民族主義的な運動と随伴してきたことが検討され、「資本の国際性が労働者の国際性を必然的に導く」のに対し一国的な利害さらに戦争に進む際の反動性が指摘される。加えて（当時の流行語にもなった）「文芸復興」も17世紀の戦争と内乱の「深い不安が逃避的に静安を要求する」個人主義と自然への関心として、1930年代の（書道や釣のような）趣味と娯楽への「安全第一への媚葉」として対比される。そして資本と労働者の国際性やそれに伴う「人類の等質化」と抑圧・浪費の進行に対して、ロマン主義を取り込んだ自由主義が「ついに常に国際主義の敵である」とし、萌芽的ながら「労働者の国際性」と「現代のリアリズム」が対置される。後に「近代批判」を掲げ登場した保田與重郎や亀井勝一郎ら「日本浪漫派」が「京都学派」の中心と結託して「近代の超克」や「大東亜共栄圏」肯定に移行し、「自由主義」派の多くも侵略拡大の中で体制内合理主義に取り込まれた事実からもこの見透しは妥当だったといえる¹⁴。

この後の『世界文化』同人にも市民社会・個人・啓蒙といった「自由主義」的概念を単純に切り捨てるのではなく歴史的な文脈で再検討し、加えて「労働者の国際性」——反ファシズム運動の動向をより深い歴史的過程として探求する関心が引き継がれていく。

3-4 「Subjekt の問題」：「観測的主体／血的主体」との対決

これまで触れた諸論文において中井の理論展開は当時の思想状況への位置取りを模索する動機が顕著であるが、同時に「瀧川事件」の渦中において運動を組織しようとした大学（文学部）でのアカデミズム内部での経験の総括が直接反映している。中井たちが所属していた京大哲学科では既に同人と近い左派の戸坂潤や三木清は京都を去って東京で活動しており、文学部のアカデミズムの主導権は和辻哲郎や（中井らの「先輩格」の）高山岩男・高坂正顕ら所謂「京都学派」に移りつつあった。この哲学科のリーダーだった田邊元は中井や真下とも親しく例外的に処分反対の立場をとっており、思想的にも西田哲学を超える自由論・「行為の哲学」を打ち出そうとしていた。たとえば1935年の「哲学への通路」で示された「否定的媒介」としての「実践」の哲学は中井らにも明らかに影響を与えるが、その「存在への随順」の自由という思想は（西田幾多郎の「絶対無」と表裏で）国家体制への現状追認を（とりわけその追従者に）許容していく。中井の諸論文の「実体論と関係論」のアンチノミーの乗り越えや「集団的主体の実践」といったテーマ自体が明らかに三木たちの「構想力」や「協同主義」と共通する問題設定だが、そのファシズムへの陥穽を避ける開かれた論理に向かうための長い対峙を要した。

1935年9月雑誌『思想』に発表された「Subjekt の問題」もこうした文脈で認識論上の「主観」を考察するにとどまらず、活動を開始した『世界文化』グループの「実践的主体性」を理論的に位置づけることに踏み出している。この論文で冒頭から中井は「主体」を現す語がギリシア語の「基体」（ヒュポケイメノン）から近代的 subjekt に移行する中で、根底・本質的な存在から個人の主観への「動座標的なコペルニクスの転換」が言語において起こったことを確認する。この「実験的観測的主観性」は「見ること」—— 経験を通じて認識する「動力学的世界像」は、「個人の自覚とその自由の希求」としての自由主義と「個人主義的市民文化」の基盤とされる。さらにこの経験の「超越的統合者」としての「観測的主体」はカント＝ベーコンの合理主義からフィヒテの「絶対的主観」としての「自我」に移行し、（ドイツ）民族主義と結びついた「血的主体性」—— 半封建的ユンカーの「意志」の体現に到ったとする。

そしてヘーゲルに到ってこの「絶対的主観」が「弁証法的に『己が制限を突き破って』」ついに客観性へと展開してゆく」発展のプロセスとして把握し、「真実」を実体 Substanz の無限運動ではなく主体性であったと指摘する。そしてその「弁証法的主体性」は「自立性と自由性」を崩壊と再建の「危機的契機」として、「みずからを否定の媒介」とする展開する「党派的契機」として規定される非連続的な「実践的主体性」であると規定する。中井はこの非連続性としての「実践的主体性」を、「知識階級の自由主義のもつ限界性」に照応する「観測的主体性」の連続性と非連続性の間での動揺と、特殊性に自覚のない連続的媒体と共在する「血的主体性」と区別する。前節と重ねればそれはアカデミズム的自由主義の静観的「観測的主体」と民族主義に傾斜した「日本浪漫派」などの「血的主体」に、自らの「安らう場所なき発展と緊張」としての主体の位置を表明したものだと判明する。

以上のこの時期の諸論稿を通じて中井が考察した「模写」「リアリズム」「実践的主体性」や「自由主義の限界」の概念は明らかに当時のマルクス主義の影響を受け、「集団」一般から歴史

性や生産関係の枠組を組み入れるものであった。ただそれは「非常時共産党」や「唯物論研究会」でも主流であった客観主義的な公式的「弁証法的唯物論」よりはむしろ、三木清やルカーチを経由した主意主義的な「主体性」実践哲学的美学的・文化批評的な理解に近しかった。すなわち西田哲学や「京都学派」の「主観」による静的な現状追認に対してハイデガーを足掛かりに行為・実践への「躍入」を意味付ける一方で、「満州事変」以後の大衆運動の自然発生性後退を受けて機械論的な階級闘争の高揚が望めない現実をどう受け止め突破するかという課題意識が示された。これらの諸論稿に共通するのは自由主義などを既に乗り越えられた「ブルジョア（プチブル）的」概念として切り捨てるのではなく、「市民社会的」諸価値を変形して組み込まれるという独特な「弁証法」的思考方法が随所にみられる。その歴史的な文脈と転化を詳細に検討し「討議と実践」を経て次段階に織り込まれてゆく過程を考察する方法論は、構想されつつあった「委員会の論理」などに結実する『世界文化』集団の一つの共通思考ともなっている¹⁵。

『美・批評』再刊以降における中井正一の理論的貢献は何より情勢分析・階級闘争一般ではない運動主体と実践の動態への関心を鼓舞し、左右からナショナリズムに崩落する思想状況に抵抗する根拠を思想史的角度から考察する枠組を提示したことにあるといえる。

第 四 章

4-1 概況：初期『世界文化』の左派「同人雑誌」しての出発

この章では初期『世界文化』（1935年2月創刊号～12月第十二号）の雑誌記事に焦点を当て、その固有の「雑誌メディア」としての意味とグループの活動における位置付けを考察する（この領域の詳細なデータと考察として特に山岸（2002）を参照）。この雑誌はこれまで（1960年代以来）政治的な「（ヨーロッパ）反ファシズム運動の紹介」または「リベラル市民主義」であれまたは文化的な良心的（進歩的）「反戦的啓蒙運動」のいずれであれ、「知識人運動」の宣伝媒体とする評価が先行して来た。むろんグループにとって主観的に雑誌が「対外的メディア」の性格も有するが、一方で運動方針の実現や大衆啓蒙を目的とした政治宣伝雑誌とも研究成果の発表を目的とする学術雑誌とも異なる情況批判の練り直しの学習という意図も読み取れる。創刊に際して「反ファシズム」を共通課題としながら「同人雑誌」とすることには外部（特に党シンパ）や内部（瀬津等）にも批判があったが、結局参加者内部の情報共有と理論深化を目的とした多分にアカデミックな学習啓蒙に力点をおく方針が主流となる。

この原因は「知識人運動としての限界」や「文化運動としての自己限定」（あるいは弾圧対策）というよりも、既述のように政治運動の後退と「文化戦線」全般の解体状況における新たな雑誌・言論メディアの隆盛と共通する実践的・理論的要請がみられる。すなわちこの1934年前後の「社会運動」全般の後退と評論メディアの族生・とりわけ「転向」組と自由主義者を両輪とした文化雑誌の台頭のなかで、従来の左翼理論を吸収しつつ教条的政治主義と一線を画した運動論の再建が目されたといえる。この時期『世界文化』と相互寄贈など交流があったのは戸坂潤らの『唯物論研究』のほか太田棍太・住谷悦治らの『現代新聞批判』が執筆者も重なり、他に『テアトロ』『文化運動』等「ナップ以後」の文化運動雑誌とも交流があった¹⁶。

『世界文化』もこのような「瀧川事件以後」の閉塞する状況と運動実態の壊滅のなかで追求された所謂「左派アカデミズム」の理論・研究雑誌としての性格をもつが、あくまで同人自らが「一から」状況分析・翻訳・理論付けを探究し共有しようとする点で特徴があった。この雑誌はフランスなど反ファシズム運動を紹介する「世界文化情報欄」がよく知られるが、特に初期（1935年）においては後期『美・批評』以来のアカデミックな総合的理論探究がむしろ中心を占める。ただしその内容はファシズムを単なる逸脱・突出ではなく（市民社会論とも共通する）近代社会分析から位置付け直す作業と、同時期に『日本浪漫派』などで喧伝されはじめた「近代の総決算」に批判的に対抗する歴史的考察を主軸としていた。また反ファシズム運動についても平板な「運動情報」の速報的な紹介に止まらず、その文化運動・「知識人運動」の特質と多様性ないし理論的課題を極めて実践的関心から「翻訳」することに主要な労力を投入したと言える。

発刊時の同人メンバーは旧『美・批評』以来の中井正一（35）・富岡益五郎（33）・辻部政太郎（30）・長広敏雄（30）、後期『美・批評』からの和田洋一（32）・新村猛（30）・真下信一（29）や瀬津正志（27）・森本文雄（26）・栗本（島津）勤（26）・久野収（25）・武谷三男（24）・市村恵吾（22）、『世界文化』創刊前後からの熊沢復六（36）・臼井竹次郎（27）・米田三治（26）、途中から準同人格の能勢克男（41）・加古祐二郎（30）・原光雄（26）・青山秀夫（25）らが参加した（括弧内は1935年当時の満年齢）。専門分野でも初期の美学中心から哲学・仏文・独文に広がり、さらに英米文化の米田やソ連研究（元築地小劇場所属）の熊沢、自然科学の武谷・原らと弁護士（消費組合）の能勢・経済学の青山・法学の加古などを軸に各方面の執筆者を組織している。編集方針に関して「編集後記」を見ると創刊号では「世界文化の情報と、其の文化に多少とも貢献する理論の翻訳」を掲げているが、第七・十一号では「『世界文化講座』や『世界文化の現勢・研究方針・学会動向等に関する質疑欄』の設置」の計画（同誌では未実現）が記され外部読者との交通も意識されはじめる。

『美・批評』再刊（1934年5月）以降は京大楽友会館で月二回「美批評研究会」（合評会）が随時外部参加者や話題提供者も招いて学習・相互批評を目的に常時開催され（1934.1-1936.11）また日常的に起居議論を共にすることも多く、中井宅に同居した久野が中心となり富岡・真下らとともに初期の編集・原稿依頼などにあたった。特集テーマとして初年度は「文学特輯」（第四号）、「『文化擁護国際作家大会』特報」（第八号）、「現代フランス文化特集」（第九・十号）が設定され、発行部数は各月約1,000部で講読のほか東京・大阪・京都（主に学生層）を中心に一部店頭販売もしていた。以下では「論文記事」と「世界文化情報」に分けてその内容分析に入っていくが、最初の一年は後期『美・批評』を引き継いで「論文記事」の比率が高く関東の唯物論研究会メンバーを中心とした学術的・理論的論文が目立つ。「文化情報」も反ファシズム運動だけでなく文化状況全般の理論・歴史への関心からの分析紹介が目立ち、「瀧川事件」の余燼冷めやらぬ哲学科の真下・久野らの「左派アカデミズム」糾合の意識が強く出ている¹⁷。

4-2 論文記事：近代社会思想史の再考という共通モメント

『世界文化』は（ヨーロッパの）「反ファシズム運動の紹介」雑誌として取り上げられる場合「世界文化情報欄」が主に注目されるが、特に初期において大きな部分を占めているのはむしろ多分野にわたる「論文記事」である。初年度（1935年）は平均して毎号約3本の論文が掲載され、内訳は毎月同人メンバーの執筆・外部への投稿依頼・翻訳論文がそれぞれ各一本程度で構成され、適宜特集テーマなど相互に関連する内容となることが多い。この創刊号～第十二号（九・十号は合併）の11冊でみると、同人の執筆者では真下・新村・森本・辻部が各二本、熊沢・瀬津・栗本・武谷が各一本と『世界文化』以降の新メンバーの執筆が目立つ。他方外部投稿の形の論文では関東の「唯物論研究会」周辺から甘粕石介・鳥井博郎や高沖陽造・馬場啓之介・本多喜代治、京都では『世界文化』準同人と研究会周辺から緒方勇雄・清水三男・大岩誠・今井仙一らが執筆している。

外部への執筆依頼は久野・瀬津らが「唯物論研究会」の戸坂・甘粕や羽仁五郎・林達夫らの助言を受け連絡をとり関東在住の執筆者を多く得ていたが、組織的には直接連携はなく原稿依頼や相互交換などにとどまった。翻訳論文では新村が（「世界文化情報」とともに）ロマン・ロランなど「人民戦線」派作家を紹介しているほかは、流行のシェストフの「ニヒリズム」をめぐる議論やソ連の「マルクス主義芸術論」紹介者のリフシッツやシルレル、ドイツのロエヴィトなどマルクス主義文化理論の紹介が大半を占める。同様に執筆論文でも後期『美・批評』以来の美学理論周辺では素朴な「モダニズム」肯定ではなく真下「シェストフのニヒリズム」・栗本「具体的弁証法の認識論」・甘粕「芸術学における理論と歴史」、また高沖「ニイチェ及びベルグソンの思惟と近代思想」などが雑誌の柱として掲載された号が多い。特にこの分野では真下や熊沢らを中心にソ連の芸術・批評理論を導入して比較的「正統派」的な（ヘーゲルの）弁証法をツールとして、「不安」・ニヒリズムの克服を展開し「理性」を強調する論旨が多い。

他方でこの時期の内容的特徴としては同人以外の執筆者を通じた社会思想分析への歴史的アプローチに関心が集まり、馬場・辻部・緒方・中川・谷義彦・清水三男・鳥井と数多くの論文が取り上げられている。この関心は当時論壇で左右（講座派から浪曼派まで）から「明治維新——文明開化」の時代の終焉が呼号され（ヨーロッパ的）「近代」を再考する機運が出たのに対応して、江戸後期から幕末・「明治初期」にかけての社会思想を批判的に検証する内容となっている。また創刊から三号連続で掲載された『社会学評論』誌の馬場の「歴史の問題・それに対する二つの方法」はディルタイ的な「生の哲学」に対し、「社会的主体のエトスによって文化を浸透せしめんとする批判主義の『実践的方法』」としての「科学的社会学」の基調的方向を打ち出している。また鳥井（哲学史）・中川（福沢諭吉論）・辻部（演劇史）らの「明治初期」思想論や、緒方（井原西鶴）・谷（新井白石）・清水（幕末国学）の江戸期研究は日本の「思想史研究」を「公式的・機械論的」でない「社会的連関」（清水）を分析せんとした。

これらは共通して文化・思想分野を経済・政治に単純には還元されない重層的に関連した固有領域として再考するという同人の実践的な学習関心を反映し、日本の「近代思想」を歴史性と社会的現実のなかで「転形期」から考察しようとした。こうした関心はヨーロッパ「文化情報」の論文・翻訳分野でも「反ファシズム運動」の表面的な紹介ではなく、「市民思想」の歴

史と社会構造において意味（と限界）についての社会思想史的文脈から理解する意図がみられる。ユニークな在野の批評家として知られた高沖のニーチェ・ベルグソン研究や「小説特集」でのルカーチ等の理論の批評、さらに馬場「経済哲学」論文や大岩「フランス社会構造」分析は同人の関心が次第に同時代の社会科学的分析に向いてきたことを示す。また同人に文学研究者が新たに多数参加したことからヨーロッパ文学を題材に思想史的研究を試みた論文が見られ、モリエール（森村）やモンテーニュ（新村）などフランス「市民文学」の批評は当時の文学・文化状況の分析枠組を考察する材料ともなった¹⁸。

このように初期『世界文化』の「論文」中心の誌面構成は同人の研究・学術志向への強い傾斜を示すが、それは短期的な危機告発ではなく近代日本社会の思想状況の見取り図から「知識人」の地すべりの敗北と翼賛化を対象化する必要に由来したといえる。

4-3 「世界文化情報」：「反ファシズム」の多様性の「翻訳」

『世界文化』誌名の直接の由来とも言われる「世界文化情報」欄は『美・批評』再刊以降「海外情報」としてスタートしてきたが、これも単に「先進的な」ヨーロッパの運動情報の輸入・紹介のみを目的とするものではない。むしろ当時のアカデミズムと左翼運動の双方が軽んじてきた（コミンテルン指導部以外の）反ファシズム運動の動向を報道し、自己陶酔的な「日本精神」回帰の動向に対抗する情報を広めるジャーナリズム的意図は同人にも共有されていた。だが「国際的」反ファシズム運動自体がナショナリズムに直面して（フランス人民戦線でも）微妙な分岐を孕みソ連・コミンテルンも否定的な状況で、何を紹介しどのように「翻訳」するのか自体が決して自明ではなかったのである。初期『世界文化』までの時期は同人の問題意識を手がかりに暗中模索が重ねられ、真下らのマルクス主義批評・新村らのフランス左派知識人・旧同人らの美学・文化理論の翻訳が錯綜する構成がみられる。

後期『美・批評』（1934）で始まった「海外情報」では新村のジードやマルローら作家の反ファシズム運動への参加が解説され、熊沢のソ連のリアリズムを中心とした文芸・演劇運動理論の紹介が試行的に行なわれている。この時期の『美・批評』では論文記事でも「バルザックにおける自己批判」「仏蘭西ロマン期演劇史の一面」（森本）・「ジュウル・ルナアルと『にんじん』」「ジッドの政治活動に就いて」（新村）・「シラーの『たくみの恋』について」（和田）が前者と関連して掲載された。後者の傾向では「リアリズムの論理」（真下）・「リアリズム論の基礎問題二、三」（中井）ほか、旧同人の「旋律は流動的力性である」（長広）・「アメリカ映画とリアリズム」（辻部）らが掲載され雑誌全体の「文化批評雑誌」としての方向性が前期から一部引き継がれた。それが『世界文化』創刊時に新村の主導でこの分野を「世界文化情報」として再編する過程で、広義の「反ファシズム文化運動」に徐々に方向付けられていくことが看取される。

『世界文化』発刊以降も特定勢力・既定方針ではなく各同人が反戦・反ファシズム派「知識人」の言論・行動への共感に沿って記事を選択し、1937年頃に「人民戦線方針」が注目される以前から非常に詳細・迅速に諸情報の報告を行なっている（1935年は各号平均で約7本・20頁程度）。それは新村がこれを反戦反ファシズムの「防衛戦術」ととどまらず「資本主義体制が

ゆき詰まりに達した時期ないし段階における長期的な戦術」と述べたように背景思想から歴史的に幅広く理解し共有する意図が読み取れる。フランス関係では新村がパリの「文化擁護国際作家大会」の特集を皮切りに開始したばかりの「人民戦線運動」の作家・科学者の動向を報道した他、森本が文学以外にもクレール等の映画・演劇評論、さらに人民戦線の教育学習組織としての「文化の家」活動などを紹介してその後の「大衆運動的」展開の方向付けを刺激した。一方ドイツ関係では和田のマン兄弟など亡命作家による『ザムルング』など反ナチ活動の紹介やドイツ国内の文化状況を精力的に翻訳したほか、臼井が「ルポルタージュ」分野の草分けである E. キッシュの活動を紹介している。

このように「世界文化情報」は何らかの形で同人それぞれが記事・紙面構成に参加する形で話題提供を行っており、次第に関連しあう形で文化運動としての「反ファシズム」のイメージを形成していったといえる。新規に『世界文化』から参加した人々では米田の戦間期イギリスのジョイスやロレンスの「個人的リアリズム」文学の意義や、熊沢のソ連「文芸科学」・社会主義リアリズムの動向など一連の「ソヴェート文化ニュース」が目立つ。また市村のイタリア・ファシズム芸術論批判の翻訳、瀬津のファシズム研究文献の多くの書評（特にウィットフォード『市民社会史』等）や栗本のホルクハイマーら『社会研究雑誌』グループの活動情報なども同人にとって貴重な教育材料となった。共通してこの創刊一年はアカデミックな左翼的文化理論の咀嚼と各地での反ファシズム運動実践への個々の関心の溝を埋める形で、「政治からの知識人の自立」というよりは）広義の「政治」を内包した文化運動固有の課題の発見と考えることができる¹⁹。

初期「世界文化情報」の存在理由は既にある反ファシズム運動の「紹介」よりはむしろ、同人それぞれが自らの状況・関心に引き付け思想的な文脈で「翻訳」し直すことでファシズムを分析し打破する枠組を模索し共有するための学習的素材だったとさえいえる。

4-4 小括：『世界文化』集団の達着した課題と後期への展開

後期『美・批評』から『世界文化』創刊に到る時期に同人の「ファシズム批判」の志向性はほぼ確立されたが、それ自身が大衆的な反ファシズム運動を代行するものではなく極限された状況下での「ささやかな抵抗」であるという自己認識も共有されていた。しかし1933-35年の政治運動・文化運動双方の壊滅的沈滞期にあって「大衆」から切り離された場所から出発したとはいえ、『世界文化』同人の目的をリベラルな「知識人の自己変革」（馬場）のみに限定する見解は余りに狭い。「知識人運動」として強いられた状況下で「後衛」を任じたが「大衆の組織化」に限界があったという（宍戸・菅や木下らの）評価は、『世界文化』が理論-文化運動の転換点で苦悶した意味を軽んずる非歴史的裁断といえる。上で検証したように少なくともこの時期は歴史・社会分析の論考も反ファシズム運動翻訳も、理論（路線）至上主義的な現状分析・大衆指導を克服して自らの力で分析枠組を探り当てることに向かっていた。その点でこそこの集団を既存のアカデミズムとジャーナリズムによる翼賛への濁流の追認に抗い、自由主義的啓蒙や宗派的「主体形成」とは異なる動態的な学習共同体と把握しうると考える。

この要素を改めて整理すると第一は既に「乗り越えられた」理念として放置された「ブルジョ

ワ的」市民社会の諸価値を社会思想史的な蓄積から位置付けなおし、その中から「限界」を見つつ継承し転化すべき内実を学び取ろうとしたこと。第二には多くの「転向組」が「大衆の現実」に絶望して「西欧近代の限界」への批判から安易な日本精神と民族共同体に回帰したのに対し、ファシズムへの抵抗運動の翻訳を通じていわば内的打破の道筋を探ろうとしたこと。第三にいわゆる「知識人運動」への「プチブル・インテリ」批判に対して党理論の正統性に担保された「理論」への退避ではなく、運動の方向性を検証する機能として批判的な学習を位置づけたこと。そして第四にこれらすべてを通じて政治方針履行とも学術的興味充足とも異なり第一義的に学習討議・相互批判を組織し、内的差異を内包しつつ自己増殖的に課題と関心の網を広げるという運動論自体があげられる。

しかしこうした極めて内向的な「同人雑誌」の単純な拡大延長線上には「反ファシズム運動」や変革実践がないことも、次々に議論の俎上にのぼるスペイン・フランスなどの大衆運動との落差も強く認識されていた。前後（1932年・37年）の諸運動が持ち直す谷間の時期の「転向」と「転形」が行き交うこの「言論・文芸」の時代の「孤立感」の中で、同人自身にとっても「瀧川事件敗北」経験の整理と「日本浪漫派」などの清算——翼賛への抵抗と防衛が意識された。それゆえ当初グループには崩壊した政治・労働・文化諸戦線に代替するトータルな勢力を目指すという幻想はなく、雑誌としても「唯研・プロ科」的な「体系志向」よりは焦眉の課題・関心に沿って基層的な見解を形作る情報共有への志向が顕著である。しかし「反ファシズム運動」を志した以上この「知識人運動」および研究学習組織としての自己限定には充足しえず、世界各地の「人民戦線」文化運動の台頭に反応して運動実践に向う内的必然性が当然高まった。その意味でこの初期『世界文化』の活動や理念から「知識人の自己変革／自己満足」（その活動の頂点）という性格のみを見るのは余りに狭隘で、むしろ折り返し点での自己省察と状況整理を通じた熟成期間として中期的に位置づけなおす必要がある。真下らが主導した『美・批評』再刊から『世界文化』創刊に到る1933-35までの時期と、1936年1-3月に掲載された中井の「委員会の論理」をメルクマールとして同人一斉検挙までの後期『世界文化』の間に断層をみいだす所以である。

1936年明けて「2・26事件」戒厳下の緊張を経て、2月スペイン人民戦線勝利・6月フランス人民戦線内閣成立という急展開を受けて、『世界文化』誌上でも森本・新村らが積極的にそれらの活動を報告したのを契機に自前の大衆的文化運動を展開する機運が同人内で高まっていった。そこで『世界文化』とは独立して同人数名が齊藤雷太郎の『京都スタジオ通信』と合流し、中井・能勢を中心編集に読者参加型の大衆的新聞として7月『土曜日』発刊する。また同人のそれぞれが各分野に分散しサークル・討論会を組織する形で1936年後期頃から「京都映画クラブ」・「京都音楽文化クラブ」・「演劇クラブ」やラジオ・新聞また学生サークルを通じた大衆的展開を開始する。これに応じて『世界文化』自体が新村・瀬津らを中心編集に「学術研究誌」から反ファシズム人民戦線運動の翻訳報道中心に転換を図り、映画・文芸・音楽など「大衆文化」批評も大幅に拡充して上の諸サークル・『土曜日』との分業・協力関係を整備していく²⁰。

初期『世界文化』同人の批判的討論の経験と蓄積はこうした後期以降の様々な展開において方向付けと共通した見通しの基盤を形成したばかりでなく、多くの参加者の回想にあるとおり

その後の生涯にわたる最も貴重な学習経験となったといえよう。(以下継続)

【関連年表】(太字は京都関連)

1933年

- 1月 河上肇ら検挙／ヒトラー独首相に
- 2月 「二・四事件」(「長野教員赤化事件」弾圧)／小林多喜二虐殺
- 3月 日本政府国際連盟脱退を通告／「満州国」帝政実施
- 4月 岩波『教育』発刊／鳩山文相瀧川幸辰教授免職要求
- 5月 京大「瀧川事件」(法学部教員総辞職)／前期『美・批評』終刊／ナチス焚書事件
- 6月 「瀧川事件」全京大学生大会／日本共産党佐野・鍋山ら「獄中転向声明」発表／反ナチスファッショ粉碎同盟・学芸自由同盟発足
- 7月 大学自由擁護連盟発足／同志社大学住谷・松岡・長谷部ら検挙／法学部六教授免官・「瀧川事件」収束へ
- 10月 「昭和研究会」(教育研究会等)結成／『文学界』『行動』創刊
- 11月 『文藝』『現代新聞批判』創刊／「文藝復興座談会」開催

1934年

- 1月 このころ「美批評研究会」発足
- 2月 ナルプ(日本プロレタリア作家同盟)解体声明／パリ・ファシスト暴動
- 3月 仏反ファシズム知識人監視委員会・宣言発表
- 5月 後期『美・批評』発刊(～10月)
- 6月 文部省思想局設置
- 7月 斎藤実内閣総辞職(帝人事件)・岡田啓介内閣発足
- 10月 陸軍省「国体の本義と其強化の提唱」頒布

1935年

- 2月 『世界文化』創刊／美濃部達吉「天皇機関説」国会で問題化
- 3月 『日本浪漫派』創刊／「国体明徴決議」
- 4月 青年学校令公布／文部省「国体明徴訓令」／『労働雑誌』創刊
- 5月 同志社神棚事件／『同志社派』『リアル』『京都スタジオ通信』発刊
- 6月 仏反ファシズム人民戦線結成／パリ「文化擁護国際作家会議」
- 7月 コミンテルン第七回大会「人民戦線」方針採択
- 11月 教学刷新評議会設置

注

- 1 真下(1979) p. 46「『美・批評』に就て——創刊の辞」、同 p. 56「『世界文化』創刊の辞」、山田(1963) pp. 111-112、鶴見・山本(1979) 真下「運動のリズム」 pp. 116-131。
- 2 『世界文化』同人編(1975) 座談会(第三巻) pp. 17-25、二六会(1988) 西田「瀧川事件とそれ以後の京大学生運動のあらまし」 pp. 1-41。
- 3 真下(1979) pp. 38-44「プラクシスについて——草稿断片」(『美・批評』第30号)、真下(1972) pp.

- 3-8。
- 4 真下 (1979) pp. 67-75「シエストフ的ニヒリズム」(『世界文化』第5号)、古在 (1982) pp. 104-105、郡 (1968) pp. 283-285。
- 5 新村 (1994)「一平和運動家の反省」(初出1966) pp. 21-30、日本科学者会議編 (1982)「新村猛——国際反ファシズム運動の紹介者」pp. 9-13、郡 (1968) pp. 278-285。
- 6 鶴見・山本 (1979) 和田「スケッチ風の自叙伝」pp. 334-342、京都大学新聞社 (1985) 関原・和田・池田「『世界文化』『学生評論』のころ」pp. 51-54、和田 (1976) 所収「灰色のユーモア」pp. 202-207、和田 (1988) pp. 203-208。
- 7 『世界文化』同人編 (1975) 第三巻 pp. 25-36、武谷 (1968)「解説」pp. 370-375、ねず (1976) pp. 70-76、辻部「『世界文化』と『土曜日』のころ」pp. 98-101。
- 8 藤田 (1975) pp. 5-23、菅 (1977) p. 173、平林 (1968) pp. 246-262。
- 9 郡 (1968) p. 291、小沢他座談会「〈非常時〉の文学」(1999) pp. 7-15。
- 10 長浜 (1987) pp. 109-120、鹿野・由井編 (1982) 赤澤 pp. 49-62、藤田・大串 (1984) p. 174。
- 11 佐藤広 (1997) pp. 31-36・125-132、山之内他編 (1995) 大内 pp. 221-225、酒井 (1979) pp. 14-18・pp. 37-39、民間教育史料研究会編 (1997) pp. 19-26、小林 (1997) pp. 431-443。
- 12 中井 (1981B) 全集④ pp. 17-18、同 (1981A) 全集① pp. 138-139、荻部 (1999) pp. 168-175、針生 (1977) pp. 283-287、またハイデッガー他 (1999) ハイデッガー「ドイツの大学の自己主張」pp. 115-120等、杉山 (1975) pp. 77-80参照。
- 13 中井 (1981A) 全集①「模写論の美学的連関——一つの草稿」pp. 5-20、同 (1965) 全集②「現代における美の諸性格」pp. 61-82、稲葉 (1987)「中井正一の媒介論」、pp. 25-34。
- 14 中井 (1965) 全集②「リアリズム論の基礎問題二、三」pp. 83-104、中井 (1934)「リアリズムの問題に寄せて」p. 4-11。
- 15 中井 (1981A) 全集①「Subjektの問題」pp. 21-45、梯 (1975)「哲学時評(その二)」pp. 234-253 (初出1933)、上野 (1999) pp. 157-160、尼ヶ崎 (1966) pp. 90-95、廣松 (1989)「三木清の『時務の論理』と隘路」pp. 126-148。
- 16 『世界文化』同人編 (1975) 座談会「『世界文化』のころ」(第三巻 pp. 21-30、山寄 (2002)「『世界文化』を構成する論理」pp. 31-57、小沢他 (1999) pp. 7-13、久野 (1998)「市民として哲学者として」pp. 49-59、ねず (1976) pp. 70-74、門奈 (2001) pp. 320-353「戦時下、ある小型ジャーナリズムの抵抗——『現代新聞批判』とその周辺」。
- 17 『世界文化』同人編 (1975) 第一巻、山寄 (2002) pp. 31-50、平林 (1968) pp. 251-262、京都大学新聞社編 (1985) 所収・久野・松尾「瀧川事件前後」pp. 34-35。
- 18 『世界文化』同人編 (1975) 第一巻、社会問題資料研究会 (1975)「京都に於ける人民戦線的文化運動」pp. 97-118、久野 (1998) pp. 54-56、太田他 (2003) (高沖)「『世界文化』とのつながり」pp. 101-104。
- 19 『世界文化』同人編 (1975) 第一巻、山田 (1963) pp. 104-106、新村 (1994) pp. 27-29。
- 20 馬場 (1971) pp. 27-30、穴戸 (1982)「私の視点」pp. 11-19、菅 (1977) 171-179、木下 (2002) pp. 159-161、京都大学新聞社編 (1985) 関原・和田・池田「孤立感からの出発」等 pp. 51-59、ねず (1976) pp. 71-81。

主要参考・引用文献

- 秋元律郎 (1970)「市民社会論の展開と挫折」、早稲田大学社会科学研究所ブレ・ファシズム研究部会編『日本のファシズム——形成期の研究』(早稲田大学出版部) 所収
- 尼ヶ崎彬 (1966)「主体性の思索」、『思想の科学』No. 55
- 馬場修一 (1971)「一九三〇年代と日本知識人——知識人運動における抵抗と自己変革の論理」、『季刊社会思想』創刊号
- 降旗節雄 (1989)『戦時下の抵抗と自立——創造的戦後への胎動』、社会評論社

- 針生一郎 (1973) 「中井正一のコミュニケーション論」、江藤・鶴見・山本編『講座コミュニケーション1 コミュニケーション思想史』(研究社出版) 所収
- M. ハイデッガー他 (1999) (清水多吉・手川誠士郎訳) 『30年代の危機と哲学』、平凡社
- 平林一 (1968) 『『美・批評』『世界文化』と『土曜日』』、同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究Ⅰ』(みすず書房) 所収
- 廣松渉 (1989) 『〈近代の超克〉論——昭和思想史への一視角』、講談社学術文庫
- 稲葉三千男 (1987) 『マスコミの総合理論』、創風社
- 梯明秀 (1975) 『戦後精神の探求——告白の書』、勁草書房
- 荏部直 (1999) 「モダニズムと秩序構想——中井正一をめぐる小考」、井上・嶋津・松浦編『法の臨界Ⅱ 秩序像の転換』(東京大学出版会) 所収
- 菅孝行 (1977) 『反昭和思想論——十五年戦争期の思想潮流をめぐって』、れんが書房新社
- 木下長宏 (2002) 『(増補) 中井正一——新しい美学の試み』、平凡社ライブラリー
- 小林千枝子 (1997) 『教育と自治の心性史——農村社会における教育・文化運動の研究』、藤原書店
- 郡定也 (1968) 『京都学生文化運動の問題——『学生評論』の場合』、同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究Ⅰ』(みすず書房) 所収
- 古在由重 (1982) 『戦時下の唯物論者たち』、青木書店
- 京都大学新聞社編 (1985) 『口笛と軍靴——天皇制ファシズムの相貌』、社会評論社
- 久野収 (1993) 「市民権思想の現代的意義——国家・民族・党派を越えるもの」、『葦牙』No. 18
- (1998) 『久野収集Ⅴ 時流に抗して』、岩波書店
- 真下信一 (1972) 『思想の現代的条件——一哲学者の体験と省察』、岩波書店
- (1979) 『真下信一著作集第2巻 時代と思想』、青木書店
- 民間教育史料研究会編 (1997) 『教育科学の誕生』、大月書店
- 門奈直樹 (2001) 『民衆ジャーナリズムの歴史』、講談社学術文庫
- 長浜功 (1987) 『国民精神総動員の思想と構造——戦時下民衆教化の研究』、明石書店
- 中井正一 (1934) 「リアリズムの問題に寄せて」、『コギト』3巻7号
- (1965) 『中井正一全集② 転換期の美学的課題』(久野収編)、美術出版社
- (1981A) 『中井正一全集① 哲学と美学の接点』(久野収編)、美術出版社
- (1981B) 『中井正一全集④ 文化と集団の論理』(久野収編)、美術出版社
- ねずまさし (1976) 「プチブルの同人雑誌『世界文化』」、『思想』No. 628
- 日本科学者会議編 (1982) 『科学者の歩んだ道(下)』、水曜社
- 二六会 (1988) 『滝川事件以後の京大の学生運動第1集 ファシズムと人民戦線の時代の記録』、西田書店
- 太田哲男・高村宏・本村四郎・鷺山恭彦 (2003) 『治安維持法下に生きて——高沖陽造の証言』、影書房
- 小沢信男他 (1999) 座談会「〈非常時〉の文学——『昭和十年前後』をめぐって」、「文学を読みかえる」研究会編『〈転向〉の明暗』(インパクト出版会) 所収
- 酒井三郎 (1976) 『昭和研究会——ある知識人集団の軌跡』、TBSブリタニカ
- 佐藤広美 (1997) 『総力戦体制と教育科学——戦前教育科学研究会における「教育改革」論の研究』、大月書店
- 『世界文化』同人 (1975) 復刻版『世界文化』、小学館
- 新村猛 (1994) 『新村猛著作集第二巻・「世界文化」三十年代の政治思想的証言』、三一書房
- 穴戸恭一 (1982) 『現代史の視点——〈進歩的〉知識人論』、深夜叢書社
- 祖父江昭二 (1992) 『近代日本文学への探索』、未来社
- 杉山光信 (1975) 「中井正一試論——その言語・映画の理論と弁証法の問題について」、『東京大学新聞研究所紀要』vol. 23
- 社会問題資料研究会編 (1973) 『人民戦線と文化運動』(下川巖著 (1940)・司法省刑事局『思想研究資料』特輯第77号の復刻)
- 武谷三男 (1968) 『弁証法の諸問題』(武谷三男著作集Ⅰ)、勁草書房

吉田：《精神の明晰》

辻部政太郎（1963）『『世界文化』と『土曜日』のころ』、『思想の科学』No. 17

鶴見俊輔・山本明（1979）『抵抗と持続』、世界思想社

上野俊哉（1999）『ディアスポラの思考』、筑摩書房

和田洋一（1976）『私の昭和史——『世界文化』のころ』、小学館

———（1977）『『世界文化』同人の体験——ねずまさしの回想に触れて』、『思想』No. 633

———（1988）『わたしの始末書——キリスト教・革命・戦争』、日本基督教団出版局

山田宗睦（1963）『『美・批評』、『世界文化』、『思想』No. 470

山寄雅子（2002）『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』、風間書房

吉田正純（2003）『生活への勇気（前編）——五年戦争初期・京都の消費生活運動と雑誌『美・批評』集団における『学習』位置：『中井正一たちと〈抵抗の学習〉をめぐる諸問題』（1）』、京都大学生涯教育学・図書館情報学研究第2号